

松井 勇先生を偲ぶ

松井先生は、地理学教室の三代目の主任教授に就任された。豪放磊落の初代、弁舌に長けた二代目の後を受けて主任となられた。実直・寡黙で研究室にこもっておられる事が多かったが、古来からいわれる和を以て貴しとする精神を持たれ、前主任を立て、教室を纏める努力をよくされた。例えば前主任の要請によって専門外の気候学を受け持たれ、新たに勉強しながら講義をされた。御自身は東大理学部出身で、緻密に物事に対する性格をお持ちであった故と思う。

松井先生は変わり者と評する人もいるが、むしろ常識人であった。いつもきちんとしていて、失敗のないように、人からとやかく言われぬようにと気を使っておられた。が、多少変わった所も併せ持っておられた事は確かである。地理学者として見た場合、旅行嫌いで方向感覚に欠けると見受けられる面もある。旅行といえば那須のフィールドに出かけるのみ。巡検も那須で行われた。俗にいう地理屋のように旅行好きではなく、むしろ旅行好き故に地理を志す等という事に対しては、にがにがしい思いを持っておられたようだ。

先生御自身は、純粋に地理学の本質を究める事として土地の事象の分布現象に着目され、分布論を論文に纏められた。これは先生の仕事の柱の一つといえる。

もう一つの柱として、栃木県那須に於ける農業地理研究がある。那須では、農作業一般について細かい聞き取り調査を行い、農家に委託した労働日誌の回収と分析をとおして農家の作業実態を統計的に処理した。このような仕事を微細地誌と称して纏められた。こうした那須での仕事は、松井先生独特の研究方法であった。フィールドでは、那須疎水等農業用水路をしきりに観察したり、まるきという葉たばこの処理作業を見る時など、鉛筆をなめなめ記録をとる姿が印象に残っている。

後日、日本地理学会の名誉会員に推挙されたが、それは那須の研究を地道に続けられた事が評価された為と思われる。学生にも良い影響を与え、渡辺先生をして「松井さんは、お茶大の看板だよ」と言わしめた由縁である。

松井先生には、東大の学生時代から「松井少年」というニックネームがあったそうであるが、童顔で小柄、生まじめな風格にピッタリだと思う。その少年が亡くなられる年齢になった事には深い感慨を覚える。

先生は平素健康には特に留意され、3～40分の通勤は徒歩でされていた。在職中大きい病気はされなかったと思う。退職後もいわゆる晩年という時期一病気がちで老いた日々は経験されなかったのではないだろうか。奥様にうかがうと、「一週間位前には、まさか亡くなるとは思いませんでした」とおっしゃる程の御様子だったそうである。最後まで散歩は欠かさない生活を続けられたが、或時から外出はされなくなり、家で那須の研究の資料を感慨深げに見て過ごされたという。

1996年10月2日

浅海重夫